

明治三十六年七月

崇廣

第拾九號

滋賀縣立第一中學校崇廣會

●崇 廣 第拾九號目次

●論評考説

○人類は一種なりや多種なりや	特別會員	小川廉三郎
○愛情論	第五年級	橋本久一
○自信	第五年級	藤谷三磨
○自殺に就て	第五年級	白井敬次郎
○實業家	第五年級	野村佐一
○大に浩然の氣を養へ	第五年級	中村祐寛
○海軍思想を養成すべし	第五年級	林正義
○朋友の道	第五年級	廣瀬淵龍
○競争論	第四年級	德永乾堂
○海軍思想を養成すべし	第四年級	華房季鷹
○精魂	第四年級	村上義一
○井蛙的人物たる勿れ	第三年級	谷川寅吉
○花たれ	第三年級	塚口佐太郎
○体育の必要	第一年級	山田武治
○航海	第一年級	居川市二
●文 苑		
○小金井	特別會員	伊藤榮三郎
○ちねの海の春	特別會員	澤村專太郎
○翁	第五年級	西村正太郎
○哀れむべき翁	第五年級	川瀬政七
○幼童	第五年級	中川醇
○琵琶湖畔の夕	第五年級	金谷謙一
○月	第五年級	山本繁七
○初夏の所感	第四年級	村上義一
○琵琶湖邊に遊ぶ	第四年級	西川脩三
○翁	第四年級	炊殿雄一郎
○晩秋の野邊	第三年級	野間庄三郎
○初夏	第三年級	德永英
○雁がれ	第三年級	德永英
○彦根城	第三年級	西澤德二郎

○四季の月	第三年級	西澤德二郎
○夏の夕	第三年級	芝原岩二郎
○翁	第三年級	田中時二郎
○多景島の紀行	第一年級	山田武治
○竹生島紀行	第一年級	井口哲宗
○湖畔の散歩	第一年級	奥居重能
●漢 詩		
○春江外一首	第五年級	中村祐寛
○客中遇秋外一首	第四年級	飯村祐念
●新 詩		
○琵琶湖の西岸に旭光を仰ぎて讀める	特別會員	澤村專太郎
●和 歌		
○松下泉外四首	特別會員	福永作十郎
○歌十首	第五年級	山本繁七
○秋歌二首	第三年級	宮野專太郎
○和歌三首	第三年級	大東三男
○和歌二首	第三年級	谷澤齋一
●俳 句		
○俳句五首	第五年級	山本繁七
○俳句八首	第三年級	重森平一郎
●小品漫録		
○漫言	第五年級	白井敬二郎
○沈思余録	第五年級	中川醇
○汝の心霊を覺れ	第五年級	野村佐一郎
○讀史余稿	第四年級	外村孝三
○隨感隨筆	第三年級	野間庄三郎
○金龜山に遊ぶ記	第一年級	赤石順三
○所感	第一年級	大井洋
●雜 報		
○數十件		
○數件		
●會 告		

崇 廣 第拾九號



論評考説

人類は一種なりや多種なりや

特別會員 小川 廉三郎

坤輿の上に生息する人類、其數幾億萬、之を其風俗習慣の上より見るも、文明の程度より見るも、其体格容貌の上より見るも、千態萬様に於て、所謂文明人と、野蠻人とを、比較するときは、單に其文明の程度に於て、相距ること遠きのみならず、容貌体格の差異も亦甚しく、殆ど同一人類に、属せざるが如くあるものあり。されども、其差如何に大ありとはいへ、白人と黒人との間に、兎と虎と、猿と狐との間の如く、所謂目の區別なきは勿論、鹿と馴鹿と、牛と羊と、又ゴリラ、オラングータン、シンバンジーとが、夫々異なる如き、所謂属の區別をも、認むることを得ず。然れども、属は更に數個の種に分たる、即獅子虎豹猫の如きは同じ属あれども異種たるあり。地球上幾多の人類中には、かくの如き、所謂種の區別を、認むるを得可きや否や。此に於てか人種説起り、或は一種説をとり、或は多種説を唱へ、専門學者の他局外者に至るまで、各其好む所に党して、議論紛々決せず、

創世紀は、人類の原始を説きて、アダム、エブに出つゝをす。従て、創世紀を確信する人は、一種説を信じて疑はず。若し多種説を正しとせば、創世紀に説く所は誤りからざる可らず、宗教の根基を、薄弱からしむる恐れあり。されば、宗教家は、概ね一種説を歓迎する傾きあり。

然れども、一派の論者は、利己上の見地よりして、人類多種説に、賛するものあり。驕傲ある歐洲文明人の或者は、他人種殊に有色人種を排斥し、本來白色人と有色人とは、祖先を同くし、種を同くするものにあらず、従て同一の權利を有するものに、あらずとし。甚しきは、一は先天的主治者にして、他は天帝が、優等人種の奴隸として、造り出せるもの、或は漸次勦滅に歸せしむ可きものあり、との暴説を唱ふる學者さへありき。今猶歐米の、其同人種に對しては、博愛慈仁ある人士が、やゝもすれば、異人種殊に有色人種に對して、殘忍暴戾ある行爲を敢てして、憚らざるは、また如上の見解あるに基づく。かくの如く、人種説に關しては、局外者各其利己の見地より、論難甚盛にして、學者また之に動かざるゝの傾きあきにあらず、議論紛々として、未だ一定するにあらず。今兩者論旨の要點を述べて聊か之が論評を試みん。

一種論者は曰く。

一、世界人類に觀る身体上の相異は、他の動物の、一種中の、變種の相異の如きものにして、種の區別と認むることを得ず。

二、世界各地、何れの男女をとりて、相配偶せしむるも、能く生殖作用をなす、他の動物の間には、同種の間に非れば生殖作用を營むことなし、故に人類は一種あり。

多種論者は曰く、

一、異地方人類、相互の間に存する、身体上の相異は、他動物に於て、種の相違と認む可き者あり。

二、異地方人類の配偶は、生殖力に差異あるを見る。例ば甲地の男女相配偶すれば、生殖力盛にして、生兒强健あれども、甲地の男子とて乙地の女子と、配偶すれば、生殖力微弱にして、生兒また虛弱あるを免れず。異種の動物を配偶せしむれば、雜種を生ずることあれども、其結果またかくの如し、則人類は多種ありと、いふを得可し。

兩論者の説く所、大略上の如し。一、に於て、一は人類身体上の相異を、種の相異と認む可しといひ、他は種の相異と、認むること得ずといふ、單に見解の相異にすぎず。二、に於ては兩者共に、異地方人類配偶の生殖作用に付きて云爲し。一種論者は、異種動物の配偶は、生殖作用をなさずといふと雖も、異種動物間の雜種、必しも生ぜざるにあらず。且つ兩論者の論斷せることの如き、共に確實ある、實驗の基礎あるを要す然れども、異地方全般にわたりて、其配偶を試むるが如きは到底不可能のことに屬す、兩者の論據共に薄弱あるを免れず。要するに兩者各、種とは如何あるものか」との見解を異にして、徒に相論難するにすぎず。されば、吾人は先づ種に關しての、見解を確定し、而して後、人種説に及ばざる可らず。以下更に種に關する學者の諸説を記述して、其觀念を明にせん。

形狀構造相類似し、たとい差異ありとも、其差異は、變化の爲に、生じたるに過ぎずと、認むるを得可き動物の團隊を、種といふ。(ブルーメンバッツハ、獨)

血統を傳へて、相繼げるもの、親を一のするもの、相互に相類似すること、親子兄弟の如くあるものを、總括して種といふ。(クビエール、佛)

特殊の起原を有し、體質の特徴を遺傳繼承する動物の團隊を、種といふ。(ブリチャード、英)

明瞭ある類似點ある動物の團隊にして、一對の祖先より系統をひき、或はひけるが如く、想像せらるゝも

のを、種といふ。(ブリントン、米)

以上諸學者、各定義する所ありと雖も、或は空想に失し、或は散漫に流れ、以て準據とす可きなし。我坪井博士は曰く。

同時代に生存せる動物にして、雌雄の區別の外、形態上同一あるもの、或は仮令極端の例の間に、多少の相異を認むるとありとも、二者を連續せしむる時は、中間物を有する者の團隊を總括して種といふ、と。最もよく、要を得たるものといふ可し。而して博士は此準據により、地球上各地方に住する人類の差異は、中間物を以て、連絡するを得可く、人類の一種ある可きを、斷定せられたり。身體長大皮膚白皙、碧眼黃毛ある歐洲人と、皮膚深黒鼻梁低く、口唇甚しく突出し、狀貌醜惡あるチグロ人を、比較せば、兩者の差異甚しく、到底同一種と思惟す可らざるが如しと雖も、近時地理の探險、人類の研究、大に開け、世界各地、阿非利加の内地、南洋の孤島に至るまで、其住民概ね知られざるなく、歐洲人は概して白哲ありと雖も、其間多少の赤色または褐色を帶ぶるあり、蒙古人の黃色、亞米利加土人の銅色、馬來人の銅褐色、亞非利加土人の黒褐色、又は深黒色に至るまで、千態萬様にして、兩極端を比較するときは、其差異天淵もたゝからずと雖も、其間各中間物の連絡せるありて、確然たる區別をなす能はざるを、知るに至れり。其他人類分類の標準とす所の、眼球紅彩の色彩の如き、頭蓋の形狀の如き、兩極端を比較するときは其差異甚だ著しく、中間物を想像せずば、到底同一種たるを認むる能ざる如きも、兩端より各其近似あるものを求めて相進めば遂に兩者互に相一致して兩極端はこゝに全く中間物を以て、連絡せられ、判然區劃をなす能はざるに至る。此等形態上の差異の外、言語風俗習慣等の差異あれども、此等は所謂後天的區別にして、交通往來等、人爲の事情によりて、變異せらる可きものにして、人類區分の標準とすに足らず。

以上論せるが如く、我神州の日本男兒も、碧眼黃毛の歐洲人も、亞非利加のチグロ乃至南洋の土人も、現狀に於て容貌の美醜文明の等差、甚著しきものありと雖も、其本原に於て同一種に属す可きこと疑ふ可らざるあり。彼の白色人は、先天的優良人種にして、他の有色人種は、其奴隸從屬ある可きものあり。といふが如きは偏見固陋、世界の大勢に通ぜざる、一部歐洲人士の、自ら爲にせるもの、妄説にして、もとより論するに足らざるあり。

愛情論

第五年級 橋本久一

世に至安至樂ある所はと云へば、常に佛家の極樂、基督教徒の天堂を指せども、こは元より死後の事、直に以て現世に致すべからず。予願ふに眞誠至純なる愛情の結合を以て成立せる一家こそ、所謂極樂天堂にも増したる樂園あれ。かの美酒佳姫に飽き、終日逸樂之事として以て、實に快樂を得たりとあすものゝ如き、其愚其昧眞に憫むに堪へたり。これを事實に徴するに、自己の欲する所は必ず之を得、望む所として叶はざる事あき貴紳豪富の輩が、其身神の安らげき点に於て、却て藁家陋室に起臥せる野人田夫に比して、逆比例せるを見るを以ても知るべし。

抑人は元來感情の動物ある事既に萬人の知悉せる所あるが如く、些末の事にも、一度其感情を害せられたる時は、如何に時日を経過するも、全然之を忘却し畢る事能はず。又極めて瑣細なる事にも、偶我に同情を寄するものある時は、心底より感謝の意を生じ、延いては之を戀ひ慕ふに至るを常とす。されば人は誰れも皆自己に同情を表する者即ち、意氣相投する者を求めて、以て己が精神を慰藉せんと欲す。而してかゝる方面

に於て若し失敗せむか、失望の極自暴自棄となり、酒色を假りて、依りて以て一時の煩を遣らむとするに至る。然れどもかゝる肉体的の快樂を以て、精神の苦惱を除き得べくもあらず、失敗は更に失敗を生み、落膽は更に倍舊して、其結果世を果敢あみ、人を恨み、且多年酒色に沈溺せし爲、身軀の健康を害し、神身共に快からず、終には中にて意志稍強きものは、墮落して罪惡を冒すに至り、又意志薄弱ある徒は、自殺等をおして身を了るに至る、豈悲惨あらすや。見よ市井間日々新紙の材料とされる雑多の諸罪惡は、極少ある一部の例外を除くの外、總て之れ愛情の缺乏より生ぜざるを。

此に於てか知る、愛情即ち精神の慰藉あるものが、我人類に對して生命に亞げる最必要物たるを。而して精神の慰藉は前にも述べたるが如く、美酒に非ず。佳人にあらず。はた絶景に非ず。況んや雜戲遊欣の類には猶更あらず、我心を安せしめ、我心を慰むるものは、必ずや、熱烈至純ある愛情あらすんばあるべからず。熱烈至純ある愛情とは果して如何あるものを云ふか。男女間の戀愛の事あるか、世の詩人文士は之を以て、誠に然りとせざるも、予は不幸にして未だ彼等の間に於て、至純至潔ある愛情を認むる事能はず。諸兄姑く心を静めて考一考せよ。兩性間の戀愛や、いかに辯解するも結局、肉體的の意味を含有せざるはなし。暴論ありと云はゞ云へ、含有せずと云はゞ偽りあり、假面あり、畢竟これ青春の血沸き返へれる時代の負け惜しみ也、詩人文士の空想也。且や元來婦女あるものは、戀愛を生命とせるが如く、其意識の發達極めて不完にして、未だ母乳によりて生活せる間のみは、天然の儘を保てども、漸く片言の一つも言ひ得るに至れば、早くも耻羞の念を生じ、容姿を修飾せむが爲めに之れ日も足らざるにあらずや。されば女子に於て、天真の儘ある精神を見む事は、幾億万の星霜を閲するも、蓋し不可能の企望たらむのみ。

世間多數の沒趣味ある人々が劣情を挑發して以て、其喝采を博せむが爲めに、殊更らに不自然極まる、現象

を寫して、所謂裸裎畫あるものを描き、てれ隠しに、之を見て、實感を挑發するが如きが、自然美の趣味を解せざるの徒かりと、聲言せる卑劣ある畫家と好一對、兩性間の愛情を以て眞聖ありと絶叫せるもの、夫子自ら、自己が觀念の低卑を自白せるものにあらずや。

予惟ふに至純至潔ある愛情は、親子を除けば、それ友情か。親子間の愛情たるや、天地間之に比すべきものなく、最美最潔あるものかれども、之れ終生續くべきものにあらず。茲に於てか、愛情の範圍は益々短縮せられぬ。然も今日の狀態に於ては、其れを、殆ど求むべからざるが如し。それ風俗の墮落、道德の頹廢、今日の如く酷だしきは他に其比を見ず。此間に生れ、此間に成育せし者は、居常不潔ある空氣を呼吸せるが故に、不知々々の中に、精神溷濁し、利害の爲めには、百年の親友も、之を賣ることを敢てするを辭せざるが如き人非人たるを常とす。かゝる間にありて、熱烈ある愛情を有する所の友を得んと欲するは、天上の星に達するよりも至難の事に属す。噫然らば今日の社會にありては、純潔ある愛情は終に求むべからざるか、精神の慰藉を得ん事は望むべからざるか。

否々、天はしかく無情あるものに非ず、かゝる間にありても、猶眞誠ある愛情を以て、精神を慰むべきもの唯一つを吾人に附與せり。こを聞かば人必ず驚きて問はむ、親子、男女、友情を除きて、他に果して愛情あるもの存するにやと、答へて曰く然り、即ち無邪氣ある少年之也。かく云へば或は異しみて曰はむ。之れ不自然極る男色に非ずして何ぞや。それとも、人間三分妖怪七分の如き醜少年を愛するにやと、其然り、豈其れ然らむや。容貌の美を以て、偏愛するは、かの兩性間の戀愛と何ぞ選ばむ。等しくこれ色情にして、愛情と似て最も非あるもの也。予が所謂愛すべき少年は、唯無邪氣あるを取る也。天真爛漫あるを取る也。彼等少年も亦、目的なく、耻羞なく、只管己を愛するものを喜びて、心底より景慕し、懷付する也。されば顔

貌の如何は第二あり、否寧ろ問ふ所に非ず、然れども記せよ。容貌極めて醜怪ある者は、かの不完全ある家庭に人と爲りたる者が、一種偏僻ある悪性を有するが如く、自己容貌の醜惡を以て、恰も他人之をあせしかの如くに思惟し、他の完美せる容貌のものを、讎敵の如くに憎惡し、且嫉妬するの情凝りて、遂に救ふべからざる悪性を有するに至る。これ決して予一人の速断にあらず。古今有識の士は既に々々論證せる所あり。英の文士ヘブワルス、デキクソン曰く、「美貌は獄裡に於て稀に見る所あり」と、知るべし、容貌醜怪ある徒が、いかに常人に比して、精神の正しからざるを。故に妖怪七分人間三分とも云ふべき少年は、他人の眞實に憐憫の情より之を厚遇するあるも、冷然として些しも喜びの色なく、況して慕ひ來るが如きは、断じて之れなきを信する也。さればかゝる少年は、我れより之れを棄つるに非らざれども、彼等求めて自ら愛せられざらむとするあれば、已を得ざる次第と云ふ可し。

男子と雖も、既に弱冠の頃を過ぎて、漸く邊幅の修飾を勉め、言語の前後に留意するに至れば、其言ふ所、徒らに大人臭く、識者より之を見れば、噴飯の極みあるも當人は、以て得たりとあきなが如き、最も厭ふべきものの一也。就中思想の低卑あるものに至つては、言語舉動一つとして、卑陋猥雜あらざるはなく、到底士君子の傍に近くべからざる底のもののみあるに反して、七八歳より十四五歳に達せざる迄の少年は、未だ學識經驗に富まざる代りに、未だ墮落の淵へは一步を投せざる中あるが故に、其精神恰も玲瓏たる美玉の如く又晃々たる満月の如く、一點の陰翳もなく、隨て其舉言語等、一點の邪氣なく、一點の野心なし。愛度氣なき顔に、微笑を含める衆兒の嬉遊せるを見れば、心中の不快妄念一切之を脱却して、我も再び少年時代に返りたるの感あらむ。「小供は佛様じや」との俗語眞に人を欺かずと云ふべし。誰か少年を見て之を愛慕せざるものぞ。げに愛すべきは無邪氣ある少年ある哉。

あはれ、世に精神の慰藉を得ずして、煩悶苦惱せる人々よ。速かに起つて少年に赴け、虚欺多き、世と戦ひて、失望の深淵に沈める弱き者よ。爾が滿腔の愛情を以て神の子の如き、天使の如き、天真爛漫ある少年に注げ。然らば爾が骨で受けたる、劇しき心裏の創痕は速に癒されむ。(終)

自信

第五年級 藤谷三磨

滿天下皆然りとする時吾れ獨り否ありと云ふも吾れ獨り然りと云ひ、獨立特行、正義の下に進退する之れ是れを自信に厚き大丈夫と云ふ、而して人の此の世に處し希望の彼岸に進むものは實に斯の如き自信かかる可からず、凡そ人の希望を達せむには其の行路或は峻峻たる山岳あらむ濁流澎湃たる洋流あらむ、而して之れに遭遇すれば撃破する勇氣なく、徒らに行路難の歎聲を發し、或は之れに遭遇せざるも區々たる世の毀譽、瑣々たる人の褒貶の爲めに其の心を左右せらるること浮草の彼岸此邊に漂ふに異ならず、遂に心にもなき墮落の淵に落ち可惜身心の自由を束縛さるるに至る、これ自信なくして其の所見所信を斷行し難關を排除し、俗言を打破する勇氣なきあり、故に達人は所信あれば断じて行ふ、鬼神も避くる所以あり、トラハルガの戦の前一日ある人英將ネルソンに問ふに明日の勝敗を以てす、彼自若として曰はく我が軍大陸を利と、何ぞ其の自信の盛あるや、此の自信ありて初めて彼の大捷を得たりしかれ、彼のコロブスの米大陸を發見するや初め西航すれば必ず印度に達すべきを信すること深く、航海の資を求めむとして東奔西走し、英王に説きて用ゐられず、葡王に勸めて容れられず、而かも屈せず遂にカスチル王の補助によりて辛ふじて航海することを得たり、又船中に於て部下の水夫に恐迫せられ殆んど死せむとし而かも撓まず能く自信の勇を

鼓して苦辛慘憺を嘗め盡くし、遂に新大陸を發見し後世其紹介者として三尺の童子も知らざるかきに至れり又我朝徳川幕府の末葉に當り、外は泰西諸國頻りに通商を請求し、黒船は邊海に出沒して機を窺ふ、内は尊王攘夷勤王佐幕の兩黨ありて相争ふ志士は東西に奔り南北に馳せ、人心恟々、實に天下安危の秋あり、此の時に當り大老井伊直弼其の情勢を鑑み、偉大ある自信力を以て獨斷外國と通商條約を締結せり、而して其身は無謀ある攘夷黨の刃に斃れしと雖、今日の文明を誘導せし効は莫大にして日月と共に後世に傳はらむ、然り而して若しコロンブスに自信力なく英葡王に遊説して採用せられざるを以て或は水夫の恐迫の爲めに其の目的を打棄せば新大陸發見者の榮名を荷ひ能はざりしからむ、否、國家の安危に關せしからむ、苟しくも人の世せしあらば、恐らくは今日の文明も見能はざりしからむ、否、國家の安危に關せしからむ、苟しくも人の世に處して碌々草木と共に朽つるかく短小にして貴重なる五十年の一生を以て、偉巧を建て大成をあさむと欲せば一日も安閑たるなく、事の是非、邪正を判じ正ありと信せば前途を想ひて徒らに躊躇し、目前の困難を見ては空しく逡巡するなく之れを實行すべきあり、孔子の所謂「三軍の帥は奪ふ可く匹夫の志は奪ふ可からず」てふ自信の勇を以て事に當らば如何なる難關絶壁も透徹するに難たからむや。

現今學生の風儀大に亂れ競ふて高襟を優美ありとほこり、勞苦を嫌ひて逸遊に趨り甚しきは劣情の奴隸とある、社會の學生を遇するに如何ある位置を以てするか、余は述ぶるに忍びざるあり、是れ學生中の一部のものが自己の身の尊きを知らずして獨立の精神あきが故あり、即ち自ら侮りて後人之れを侮るあり、而して近今東洋は歲寒く、蓬絶へ道義亂れて元氣衰へ滿清の野は百鬼夜行に任せたり、惟り我日本は此の間に常盤の色深く名聲宇内に隆々たり、而して餓に叫び翼を振ふ雄獅猛鷲は清洲四百餘洲を蹂躪せむとす、其の急を救ひ其の難を助くるは、人種を同じ、文字を同じ、風俗を同する鄰邦、我が帝國の責任にあらずや、

又我が國は四十年の短歲月を以て今日の文明を肇造し列國と比肩して、恥づるあきに至る、豈に偉からず哉雖然其の實質に於ては如何、道德は封建時代よりは退歩し、實業と理想とは國の主力に非ざるあり、然り而して是等が改良と進歩とは今日に於て計らざるべからず、此の内外山の如き事業は何人の手に依りて拮据されむとするか、他なし今日の學生青年の新らしき思想と清き手によりて成されざる可からず而るに、今日の學生は此の大責任を双肩に荷ひながら蠢々乎として惰眠せるはそも何の心ぞ、奮然起て、起ちて大ある自信を以て千山萬兵前に現はれ、江河深淵後に堪ふとも之れを跋渉して希望の彼岸に達する勇氣あれ、而して恰も獅子の百獸中に在りて而かも能く獨歩無畏あるが如く、人世の勇者を以て高く任じ、正義の爲めには滿天下をも敵として永く之れを相戦ふの勇者たれ。

自殺に就て

第五年級 白井敬次郎

自殺!!自殺!!嗚呼自殺よ、其昔死てふ事を專賣したる、武士の社會にあつてはいざ知らず、今日文明の世に、何ぞ自殺者を出す事の多きや、近時某學校生徒の自殺に亞いで、某學生の自殺するに遇ふ、抑も彼等は生命以外の或物を欲せしか、若しくは文明の重荷に得堪えざりしか、何は兎もあれ、生命の貴重なる事を、忘却せるものと云ふべし。

其れ生を希ひ、死を厭うは、人生の常規あり、殊に得意の境界にあるものは、夢現にも自殺の「チ」をも思はざるが常あり、然るに堂々たる人々にして、如何に長壽を保つと云ふとも、百歳に滿たぬ露の命を、我と我身に打散らすことは、よくよくの理ある事にこそ、而して吾人は今此の自殺に就て少しく述ぶる所あらんぞ

す、其自殺を分つて個人主義の自殺、社會的個人主義の自殺の二とす、彼病苦堪へ難く、轉輾反側苦悶の餘り、藥を仰いで死し、或は佛者の言の如く、此世を穢土とし、罪惡は滿ちて、世の終りは近けるものとして、早く此穢土を逃れんとし、若くは、自己は世の厄介者、飯喰ふ虫あごう自放自棄し、其極自殺を企つるなどは蓋し前の個人主義の自殺にして、得手勝手の理屈を付したるもののみ、苟も自己を社會の一員として考へおぼしき舉動は、決して出來得べきにあらざるあり、次に社會的個人主義の自殺は如何にと云ふに、悔悟の自殺あり、而して此自殺は、古來より世人に最も合理らしく、道理らしく認めらるる所のものにして、且つ又多くの自殺の主要原因あり。

抑も悔悟と云ふ事に、全く改悛せしと、唯だ悔いしとの二種あり、而して若し人にして、全く改悛せしと云ふ事をしもあらずらば、其人々の心や、光風霽月、人を恨みず、天を怨みず、唯だ運命に任して、靜に平和を樂むを得べきあり、而して彼の後者の悔悟とは、具象的に人の行爲に就て、單に悔恨せしに止り、動もすれば誘惑の爲め、再び惡魔の窟に陥るものあり、彼の罪人の、二犯三犯、終生罪惡の人たるを免るゝ能はざるなどは蓋し之例あり、翻て彼悔悟の自殺は如何、之蓋し改悛の人たるに及ばずして、恐ろしき罪惡を齎らして、他界の人となりしあり、而して此人々は、改悛の勇なく、死は以て罪を償ふべしとあし、改悛の難を捨て、死の易きに就きしあり、之れ所謂西哲の自殺は怯なりとの言に相當するものあり、然り自殺は怯懦あり、而して又彼等の死は以て罪を償ふを得べしと成すの過れる事よ、それ十金を盜まば万金を公共事業に投するも、決して其罪は永劫逃るべからざるを。

吾人は以上述ぶる所の全軀に通じて再び論せん、其れ世界は各種の事物相交配して、以て成立す、故に一木一草、若し之を去れば、世には空隙を生ずるあり、完全なる世は、之が爲めに缺けたるの世とあるか

り、されば世はあつて彼等自殺者をしも無用視せんや、唯だ分に應じて、之を使用するのみにして、寧ろ一片の慰藉を與へざるを恨むのみ、まして人は社會の一員にして、有機體の一分子あり、故にその生るゝや、生存の義務を有し、社會の幸福と、其の進歩發達を期するの義務を有す、ざるを自己の義務を果さず、故意に死すは罪大あり、仁ある世を不仁として恨む、罪又尠からざるあり、之を要するに、自殺は動機の如何を論せず、決して許すべからざるの事たるあり、されば歐洲の或時代に於ては自殺を罰し、正式の埋葬をだに許さざりきと云ふ、されど之は餘りに酷にして、吾人は彼の此世を以て、罪惡の世とし、未來の世を慕ひ、或は死は以て罪を償ふに足ると輩の愚を笑ふのみにして、唯だ彼等に死の無役しき事と、自殺は道德上の罪ある事、及び彼等は社會の一員ありと云ふ事を告げんとするのみ。

實業家

第五學年 野村 佐一郎

天下の物悉く必要ありと云へ雖豈衣食住より要かるものあらんや、古來衣食足らずして禮節を知る者あるを聞かず、而して衣食を供給する之れ實業あり嗚呼實業ある哉嗚呼實業ある哉、理化學者が苦心して機械を發明するも實業の爲あり、汽車も汽船も實業の爲あり、法律も大半實業の爲あり、實業の爲めに身を投ずる人を實業家と云ふ。

店頭に座して來客に頭を低くし薄利を得勉勵之を久うして國富の分子をかす者も實業家あり、工場に群集して勢力と時間を争ひつゝ諸種の有要物を製造する人も實業家あり、手に鋤鍬を採て寒暑をさけず、田園を耕作する人も實業家あり、今や諸外國との競争日一日よりも急とあれり而して實業の競争はこれ平和確實の競

争にして是に由て勝を制する時は永く國家の基礎を固くするを得べく之に敗を取りたる者は終に國家の滅亡を來すを以て各國は競ふて之が獎勵に勉め人民亦孜孜として之が發達を企圖す、實に國家の生命は今や懸りて實業家の雙肩にあり、實業盛にして國家富強あらば軍備も擴張するを得ん、禮節も正しく行はれん、今日實業を獎勵せずして徒らに軍備堅固あれ、禮節正しくあれと云ふは猶ほ樹根を培養せずして枝葉の繁茂を望むの愚と何ぞ異あらん。

翻つて實業家の状態を見るに彼等の多くは中産以下の者にして朝に星を戴いて出で、夕に月影を踏で歸る者多く、身には縷縷を纏ひ勞苦甚だつてむ、然れ共吾等は彼等を卑しむ能はざるあり、萬朝報處世の歌に曰く、『彼等が力弛む時彼等が汗の乾く時、朱綬の宰相威嚴なく紫綬の將軍名譽なく、希望の光地に落ちて果ては國家もあかるべし。彼等が鍬を捨る時彼等が校を投る時、紳士も饑を嘆くべく淑女も寒に堪えぬべく、紅顏玉姿の愛は失せ死せる社會とありぬべし。彼等は無位の王者あり彼等は無上の權者あり、黄金の冠あらすとも、四千万の生命は懸りて彼等の肩にあり。彼等は神の寵者あり彼等は國の勇者あり、食には八珍あらすとも着るには綾羅あらすとも、健全の幸身に受けて弱者を救ふ力あり云々』と、誠によく歌ひたりしと云ふべし。而して實業を起すには根本的素養として相等の學術を要するや明あり、故に今や各地方實業専門學校の設あり、世の實業家たらんと欲するもの學ばざるべからざるあり。況んや本邦四面環海の位地は海運を以て万邦に往來するに適し新舊兩大陸の中間市場たるの利は以て商業國たるべく、天然豊富の石炭及諸礦物は以て工業を興すに足り、地味肥沃氣候温和以て農業を發達せしむべき絶好の國土あるをや。

大に浩然の氣を養へ

第五年級

中村竹坡

何れの地か何れの郷か山水無からん、峨々たる高山、雲表に聳へ、洋々たる大川烟際に漂ふ。嗚呼何ぞ崇高ある、自然の美。

何れの時か何れの代か英豪無からん、英雄時に表はれ來りて忽ち仙雲横ふ山頭に乾坤の大を吼虎し、豪傑時に躍出して忽ち怒濤叫ぶ岩頭に天地の聖を呼喚す。嗚呼何ぞ偉盛ある英豪の氣。

竹坡子書を讀むで常に思へらく、夫れ自然の美と英豪の氣は相唇齒の如きか。

然りそが自然崇高の美は、大に英雄偉盛の氣を鼓舞し、偉盛の氣の英雄能く、自然崇高の美を發揮す。昔は宋の蘇轍十九歳、滿胸偉盛の氣を吐露して曰く、其語に。

「且夫人之學也、不志其大、雖多而何爲、轍之來也、於山見終南嵩華之高、於水見黃河之大且深、於人見歐陽公、而猶以爲未見大尉也、故願得賢人之光耀聞一言以自壯、然後可以盡天下之大觀而無憾矣。」

我れ能く其人の胸中、氣の盛天地に滿つるを知るあり。故に曰く、苟も生を活代に享くるもの、豈區々然として、井蛙の天、蝸牛の廬、其天の下其廬の中、空しく書に死すべけんや。

男子學生たるもの、天下の活書を繙くの隙、宜しく浩然の氣を盛に養ふべし、探れ天下に滿てる崇高の美を。漣や志賀の國、名山大川、故都名跡少からず。蜿蜒たる山嶽は四周して堅たる城廓の如く、東北の方膽靈の二峯卓出して双劍の雲霧中に峭立するが如く、西南の邊之に對立して名にし負ふ比良比叡の峯嶺あり、神州第一の大湖は渺々洋々六十里、國の中央に湛へ、若し夫れ春和景明、波瀾不驚、上下天光、一碧万頃點々た

る白帆の霞を破つて往來する様、扱は白鷗の二つ三つ四つ蘆葉の間に出没する時の如き、或は長烟一空、皎月千里、浮光躍金、靜影沈璧の時の若き其光其色人をして氣大に旦つ盛あらしむ。

加之、かけまくもかしこき中興の宗、天智の御門、都を志賀の浦和に始めさせられ、一代の帝都已に茲に春風秋爾千有餘年、今しも長等山頭春にして、櫻花盛んに香に匂ふ、何ぞ其昔の豪華を夢みしむる。

或は金龜山上、高樹蒼々綠雲の間に天主閣はの見えて、かの幕府の威臣井伊公榮盛の古を忍ばしめ、或はかの構造の美地勢の勝を極めし安土城、今は千万の松樹錦の翠を織りかざし、天主閣朽ちて名残なく、斷碑殘壘苦むし松吹く風夕陽にさびし。

是等山嶽の壯、大湖の偉、故都舊跡の名残、忽ち之に登り之に臨めば、慨然として古の豪傑を想見せしめ、自か氣の盛旦大を覺えしむ。

嗚呼我が親愛ある四百の男子よ、天地の美は汝等が境を圍繞せり、自然の色忽ち目にすべく、自然の聲忽ち耳にすべし、學を大に志さんと思せば氣大にせざるべからず、汝等中學講を聴くの暇あらんか、宜しく自然を友とし以て浩然の氣を養へ、天下廣莫、縱横無盡無涯、其間には大山の偉、大水の洋、大野の漠、無究の天、皎々たる月世界、嚇々たる太陽、帝都の美舊城の跡の如き大觀歷々として眼に溢る、實に天地間は無盡藏之を取らんも咎むるものなし、いざ大に養へ浩然の氣。

海事思想養成をべし

第五年級 林 正 義

凡そ世に航海者程不幸にも亦危険あるはあらざるべし。一隻の船を生命の繩として、戀しき故園を離れ、渺

々果してもなき大海原に乗出し、万里の絶域にも行かざるべからず。且其間時としては風浪の襲ふあり、或は暗礁の險ありて其危険其苦辛一方からず。まして彼の軍艦に乘じ敵艦と相見ゆる時は、或は水雷は或は砲彈の爲にも撃沈せられて、千尋の海底に沈み、空しく死骸を魚介の餌食と爲さるべからず。あゝ不幸にして而も危険あるは航海者からずや。

然れども斯く不幸のみを言立つるは、これ唯凡情より見たる處にして、未だ航海者の半面を知て他の半面を知らざる者、即ち一を知て二を知らざる者と謂べし。凡そ物に一利一害あるはこれ勢の免れざる所、即ち利のみ有ることなく、又害のみあるてふ事なし、今航海者に於ても之と同じく、此危険と此不幸とに代りて、局外者の得知らぬ大なる愉快と名譽とを有せることを知らざるべからず。

今夫れ己が故園を去て遠く遙かある海上に乗出せし時、秋天一片の雲だにあく晴れ渡れるに、一輪の玉兔は皎々と清光を放ちて、縹渺たる海波を照し、大小の魚族は波上に潑潑として躍れば、清光碎けて白銀の鱗の如く、はた百千の金蛇の如く、滿眼風光畫も及ばず、かゝる時飄然甲板上に立出で、吹きくる海風に面を拂はせながら、此の雄麗偉大なる佳景を恣に賞玩し、顧みて同僚と共に高言放談するが如き、あゝ航海者の心如何なる愉快ぞや。且又た、朝には北海に在りて魚鼈の群を追ふも、夕には南島に來りて奇岩珍草を愛玩し得るもの、これ實に航海者あり。或は又、其國の何たるを問はず鄭重なる國際上の歡迎を受け、名も知られざる異種の人民と相交はる等、其の愉快とする處、はた名譽とある處は決して區々たる小天地に躊躇せる者の夢想だも及ばぬ處なり。

夫れ既に斯の如き愉快ある娛樂を持し、斯の如き偉大なる名譽を有せる航海者こそ、眞にこれ天下の大幸福者と謂ふべけれ。余は今茲に、航海者の幸福あり名譽あるを云ふと共に、其必要あるを述べんとするあり。

今試に地圖を掲げて東洋の有様を見れば、太平洋上の形勝に雄據して、前後幾千の群島衆星の北辰を撰ぐが如きは、云はすして我帝國たるを知るべし、又史を繰りて我帝國の歴史を見れば、誰か我日本の民族忠勇義烈あるに感動せざる者あらん。されど我等國民たる者は、徒に此の名譽ある大日本てふ名辭に眩惑すべからず、今や我日本帝國の前途は多難あり又多忙あり、多忙多難の處、即ち英雄男兒が畢生の智能を揮て以て我國の大方針を定め、國威を發揚して萬國史上に赫灼たらしむる唯一の好機にあらずや、然り日本男兒は大に此好機を利用して、帝國の尊榮幸福を企圖せざるべからず。諸君は知るからん、日本廣しと雖も、世界の廣きに比ぶれば實に九牛の一毛にだも如かざる事を。されば斯く限りある國土に限りなき吾々人民を容れんとせば、國家は遂に衰弱せんのみ、あゝ之を救助するの策は、唯だこれ冒險的事業に依るの外なきあり。

彼の歐米諸國の富強盛大あるは到る處彼の國民の足跡あらざるなく、万事に其發達盛にして、國運隆盛あるは、異竟國民の勇敢剛毅の精神、能く万里の波濤を破り、万死の危きを怖れず、以て冒險事業を企つる故にあらずや、されば我國民たる者も又、勇敢剛毅の精神を養ひ、冒險事業を企てざるべからず。而して冒險事業の如き、四百環海の我邦に在ては、専ら海運に依りて爲すべきのみ。且又た、一朝我邦と他國との間に葛藤を生ぜんとするも、我國の如きは先づ海軍力に依らざるべからず。是を以て之を見れば、我邦の如きは一日も此海事でふ觀念を離れて生存すべからざるを知るあるべし。嗚呼。國家の福利を増進せしむるものは海あり、國民の勇敢剛毅の精神を養ふも海あり、況んや日本帝國を維持し防禦するものも海あるに於てをや。されば此の偉大ある必要ある海に依て生活せる航海者の甚だ必要あるを知るべし。

今夫れ斯の如く航海者の名譽あり必要あるを知らば、我國民たるもの、誰か亦海上の危険あるを懼れ、故國を去るを悲しみ歎くが如き事ありて可あらんや。

試に顧て卿等の祖先の如何に海上に鴻業を表せしかを追思せよ、未だ不文明ある時に於てすら、山田長政の如きは、孤劍飄然遠く不毛の地を開きしにあらずや、豊太閤の如きは鷄林の地を蹂躪せしにあらずや、況や當時の如きは万里の異域の地圖すら知れざる時に於てをや。且又た彼等の命の繩と頼める乗船は如何ありしか、これ即ち僅かの風波にも敵し難き泛々たる一小舟ありしかり。然かり吾人が先祖は此の脆弱ある扁舟に棹して、此破天荒の大事業を爲せしにあらずや。今を以て見れば、船と云ひ速力と云ひ何れも學理を應用せしものにて、吾人の祖先の夢想だにせざるものあり。然るに今日の國民たるもの、これ等祖先の快活ある偉業を襲はずして、蠢爾として一生を送らんとす、恥づべきにあらずや。況んや將來大責任ある青年に於てをや。今若し此時に際し、雲烟過眼漠として歲月を送らば、後に於て臍を嚙むとも何の甲斐がある。先ずれば人を制し、後るれば人に制せらるるてふ格言は、今日青年が心肝に銘すべき時あるを知らずや。

諸君日本帝國の四面を見よ、あゝ此陸地を圍繞するものは實にこれ蒼々たる海あらずや、而も此帝國に迫りて、連に航海事業を促すにあらずや。今又宇内を達觀せんか、四方の陸地は吾人が冒險的遠征を待てるにあらずや、其間或は森々たる大森林あり、蜿蜒たる大鑛脈を藏するあり、或は鉅万の眞珠を生ずる所あり、幾千尺の珊瑚の産するあり、其他魚族の群をあせる、農産の豊富ある、吾人の手腕を伸すべきの餘地無盡藏あるにあらずや。噫我國の青年たるもの、宜しく奮起一番此天賦の富を收拾せよ。

朋友の道

第五年級乙組 廣瀬 淵 龍

親愛ある父母の膝下を離れ、懐かしき故山を辞して、山川隔絶の都邑に遊び、渺茫限りなき學海の波に漂ふ

身の股肱と待む、親屬と思ふべきものは、朋友を除きて他にあらざるあり、然らば朋友は、これ真に我が兄弟か、將た姉妹か、こゝを以てこれを見れば、これら有益、且つ親愛ある朋友間には、必ずその盡すべき道の存するや明かあり、然らば果して如何ある道の存するか、これ大に吾人學生の攻究すべくして、しかも實行すべきところのものあり。予熟今の學生の友道でふものを觀察するに多くは皆親愛を主とし、これを除きては他に友道なきが如く思へり、これ甚だ誤れるところのものにして、當今學生社界の一般に文弱の弊に陥り活氣満々たりし昔日の光景地を拂ふに至れるは、一にこゝに起因すと云ふも不可あらむ、然りと雖も人は感情の動物あり、愛なくむばあるべからず、愛なきときは人面は猶繪畫の如く、人語は猶轟く破鐘の如し故に曰はく、人にして愛情なきものは大に排拆すべし、されど、ひたすらこの愛情にのみ沈溺せるものも、亦甚だ惡まざるべからず、然らば果して如何ある方を執り、如何ある道に倚るべきか、他なし、腦中は常に愛の情水を以て之れを充たし、加ふるに、意志の強固にして、能く同胞の惡事を諫告するの力あるを要す、抑も、已に縷述せし如く、吾々學生は相互兄弟の思をなし、又その實を擧げざるべからざるものあれば、一には愛情の存するありてその親睦を全うし、又一には意志の強固あるありて相互の惡事を改良せしめざるべからず、この中何れを缺くも不可あり、今若し情にのみ走りたりとせむか、無氣力となり、制裁行はれず、遂には墮落の淵に沈み友道を全ふするを得ず、今又之れに反して理性にのみ走りたりとせむか、冷淡となり、趣味なく、遂に吾人の望むところの友道の完全を致すこと能はざらむ、故に曰はく、朋友の道は、愛情と理性との兩者相待ちて後始めて得らるべきありと、乞ふ 我々四百有餘の健兒、幸に熟慮せよ。

競争論

第四年級 德 永 乾 堂

人誰れか競争心からむ、否競争心は人生の天賦たるあり、見よ、一文不通の稚兒と雖も、己れを賞揚すること他に越ゆるときは尙陶然として喜び、人に先んぜらるるときは愁然として悲む、垂髫の童子すら尙且然り況んや堂々たる大男子に於てをや、夫競争心は人世最大の快事たるあり、又時としては刺激藥となり、興奮劑とある、所謂勤勉、忍耐、敢爲、功名の原動力となり、文明、開化又是れに基す、若し社會に於て競争行はれざらむか、これ鳥に翼なく魚に鰭なきが如し、只寂寞たる死滅界のみ、何等の快味なく、何等の目的なく、何等の發明なく、何等の偉人あかるべし、實に競争心は大は國家の經營より小は百般の技術に至る迄進歩發達することを得るあり、然りと雖も又裏面より之れを觀察すれば實に恐るべき危險物たるあり、乞ふ暫くこれを説かしめよ。夫競争たるや元より千種万別、枚舉に遑あらずと雖も、畢竟左の二者に歸せんか、曰く、生存的競争、曰く、名利的競争是也、何をか生存的競争といふか、曰く、宇宙萬有の生物が各々その生を完からしむとするの競争あり、更に換言すれば一身一家の安全を保護せんが爲め、種々の方法を設くるが如き、或は一國同胞の安寧を保持せんが爲め兵馬に訴へてこれを防禦するが如き、或は植物が不完全ある防具を備へ以て外敵の襲害を防ぐが如き、皆これ生存の爲め競争せるあり、然らば名利的競争とは如何、曰く社會全般に於ける名利的競争あり、更に詳言せんか、即ち學事上の競争あり、榮譽上の競争あり、堂々たる道德上の競争たるあり、然り而して前者は個人に於ては頗微々たるも、一家に於て漸く薄く、一郷一國に於て初めて大あり、而して後者は全く之に反し、個人に於て最も甚しきものあり。

見よ彼の佐々木四郎が宇治の激流に馬を躍らせ千軍万卒をして舌を卷かしめたる快事は何に因てせられたる

か、中江藤樹がよく近江聖人たるの名を得たるは其基する所何れにあるか、他かし彼等は皆競争てふ二字の刺激に動かされしあり、古昔歐洲を蹂躪せし希臘が今や一亡國たるの悲境に沈めるは何ぞや、是れ彼等は競争に敗れしあり、實に競争てふ二字は一身の生死、一國の存亡を左右せるあり。

今や我國も昔時の龍居の窮蹙主義を取らず、世界は吾人に向て功名攫取の地位を與へつゝあるあり、吾人宜しくこの活舞臺に立ち極力競争すべきあり、若し政治家たらんと欲せば世界第一の政治家とあれ、經濟家たらんと欲せば天下無雙の經濟家とあれ、其他宗教家あり、教育家あり、各自の方向に向て勇進直行よく第一等の勳功を計畫せよ、何ぞこれが撰擇に汲々たらむや。

競争の社會に緊要ある、改めて喋々するを要せず、如何に社會をして活動せしめ、發達せしむるかは已に瞭々たる所あり、然りと雖も若し其勢極点に至れば又弊害少しとせず、一得あれば一失あり蓋しこれ天理あり、世の所謂戦争、暗殺等最も甚しきものあり、誹毀、怨望、嫉妬の如き又競争の余弊といふべきあり、是余が競争を以て最も恐るべき危險物とす所以あり。

海事思想を養成す可し

第四年級 華房季磨

夫れ我が國の航海業は、戰國時代より、徳川氏の初世に至る迄は、大に發達し、外國との通商、盛に行はれしが、徳川三代將軍に至り、國を鎖じ、外國に航することを禁せられたり、是れより此の業は、全くあどを絶ちぬ、然るに今日、我が國に於ては、其の必要を見る、故に是れに付き、聊か余の考ふる所を、此に記さん、

抑も、我が國は、港を開き、好みを諸外國に結びしより、今日に至る迄、歳を重ねること、僅に三十有餘年諸般の文物、技藝、長足の進歩を爲し、世界文明國中に數へらるゝに至り、現今に於ては、世界最大強國の位置に、列するを得るに至りたるは、即ち、日清戦争に、或は北清事件に於て、我が軍が優勝を占めたるを以てあり、

然らば國家を繼續するにあたり、我が國民は、戦争に長所を得たるを以て、是れに依り、將來世界の競争に勝利を得んと欲するか、是れ或は望み無きにあらず、然るに世界は進歩するに従ひ、其の競争たるや、平和的の競争にして、干戈を用ひず、然らば平和的の競争とは如何、即ち、實業の競争是れ也、然らば我が國は農により國家の隆盛を計らんか、土地肥沃にして、氣候温暖あるも、領土狭く、現に米の如き、我が國民の需用だに満たすに足らず、他の農産物と雖ども、米國、清國の如き、外國産の凌駕する所とあること、事實に於て明らかあり、故に農業を以て、國家の繁榮を計ること難し、然らば、將來何を以て國家の隆盛を計る可きか、我が國の位置より考ふれば、將來通商貿易を擴張するにあり、如何とあれば、濠、米、亞、三大陸の間にあり、且つ世界貿易の中心、地中海時代、大西洋時代を経て、今れ將に太平洋に移り來らんとす、而して、我が國は、外國と通商を爲すにあたり、四方海をめぐらすを以て、陸路の便を借る能はず、必ず海運によらざる可からず、然るに我が國に於ける航海業の現況は如何、實に微々たるものにあらずや、現に船長の如き重職に至つては、外人を聘せざる可からざるが如き有様あり、故に我が國は、國家の隆盛を計らんが爲めに、商業を擴張するにあたり、先づ、海事思想を養成し、航海業を發達せしめざる可からず、

見よ、彼の西班牙、葡萄牙の如き、航海業の發達せし間は、國運隆盛ありしが、英國彼れ等を陵駕し、海上の覇權を掌握せしより、彼れ等の國運は次第に衰微し、英國は世界至る所に領土を有し、商館を開きて、旭

の昇るが如き勢を以て他國を屈服し、現今の如き繁榮を極むるを、嗚呼、國家の進歩と、航海業との關係斯くの如し、故に吾人は、我が國民の海事思想を養成するは、目下の急務たるを唱導せざる可からず、

精魂

第四年級 村上 義一

仰いで巍々たる芙蓉峰の屹立せるを望み伏して洋々たる琵琶湖の激瀧たるを眺むれば、皚々たる山頭の白雪縹渺たる靈水の美は千秋其美を變せず、以て其國の天壤無窮確固不動を証するに足るもの嗚呼是れ四千有餘万神孫の生活しつゝある我神洲にあらずや、而して此が國民たるもの、一旦事あるに際せば、家を捨て、身を忘れ身体を犠牲に供し、義勇公に奉じ、誠忠以て國家に致し、或は尸を原野に曝らし、或は骨を大海に沈め、掀天動地の偉業を企て、一躍して泰西諸邦の國人をして、心肝を寒からしめたるもの枚舉に遑あらず。

看よ、神後の三韓征討の如き永く我國威を東洋史上に赫々たらしめ、北條時宗の鐵艦筑紫の海を蔽ひ、旗幟西海の天に列り腥風猖獗ある十万の元兵を玄海の泡沫と化せしめたる、又豊公が坂山倒海の勢威を以て、朝鮮八道を蹂躪し以て國威を海外に轟々たらしめ、近世に於ては、日清戦役の如き、北清事件の如き、我忠君愛國義烈無雙の兵士、血汗滴々以て支那四百余州を震動せしめ、一躍して世界の強國に列し、東洋の冠邦と呼ぶる、是れ何ものぞ致す所ぞや、曰く我神洲の精神大和魂てふ正大靈活の英氣の致す所あり。然らば神洲の精魂大和魂とは何ぞ、苟も正義の存する所、假令黃河の漲るあるも泰山の崩るあるも、我

行かん、苟も不義のある所は如何ある防害あるとも我破らんと奮興蹶起する、是れからんか。

凡そ何れの國を問はず、其國固有ある普通心の存在せるものあり、この普通心あるもの、其國世々傳承して其邦特有の性質とされるものあり。

彼の親切信實を以て善とかし、慘酷虛妄を以て惡とあすが如きは世界普通の精神あれども、万世一系の皇室に對して忠誠を盡し國家の爲めに身を犠牲に供する、潔白純良ある心即ち神洲男子の精神の如きは、我國固有の精神にして、瞬時も士民の心頭を離れず、或時は各自單獨とあり、或る時は合同一團とあり以て我邦の人心を支配し、我國の道徳を維持し我國の品位を高尙にして、我國の光輝をして万國に能く燦然たらしめ、以て依然たる東洋の獨立國として、三千歳に近き星霜を經過せし所あり、然るに方今の男子にして能く此の精魂を有して東洋の君子國民として恥ぢざるもの、果して幾人かある、彼の巍然として雲裏に聳立する富岳は、依然富岳あり、清肅たる琵琶湖は依然琵琶湖あり、我國固有の精魂果して依然たるや、

輓近外國との交際開くるに方り政治、文學、美術等皆彼より我に取りしより、人々泰西に心酔し碧眼奴の糟糠を食ひ、其極や我邦固有の精魂は地を掃ふて去り、輕躁浮薄、因循姑息の惡習慣に浸染し、道義地に墜ち禮義跡を絶ち、亦昔日の觀を失ふ。

嗚呼此の迷夢を覺破して吾邦固有の精魂を挽回すべき任や、果して何れにあるか、云はすもが、怒濤逆巻く學海に航して、將來社會の原動力とあり、國家の中堅とある吾人學生の責任あるを。

然らば吾人は泰西崇拜主義の惡風を一洗し輕躁浮薄の俗を剝脱し、我邦神聖の精魂を發揮し、國家的觀念を振起せしめざるべからず、是れ皆吾人學生の責任あり、本領あり、義務あり、豈夙夜勤むる所なくして可あらんや、

奮起せよ。金龜城下五百の快男子、苟も一片愛國の精神を有するもの、宜しく各邦對峙して、覇を中原に爭ふ活劇場裡に立ちて我國獨得の英氣を奮つて爲す所あれ。

井蛙的人物たる勿れ

第三年級 谷 川 寅 吉

諸子、かの井蛙を見よ、彼が泳ぐ處は盤大の水、見る處は井上の天、しかも傲然として思へらく、見聞の廣き、天下我に及ぶものあらざらむと、愚笑ふべし、何ぞ、獨り蛙のみを笑ふべしや。其耳は未だ天下の大道を聞かず其眼未だ天下の大勢を睹ず、讀む所はたゞ數卷の書、交はる所は野老の數人、しかも傲然として曰く、我が識見やよく千古を洞察すべく、我が事業やよく不朽に傳ふべしと、其愚や、亦、大笑せざるを得んや若し一國民の性情悉くかくあらむか、其國民は未開國人として、他國民の厭ふ所とあり、競争圏外に淘汰し去らるゝや必せり。近時我國民の風習、大に、之に類するものあらざるか、猜疑の念盛に、嫉妬の情深く忽ちにして溢喜、忽ちにして暴怒、得意に揚々として、失意に沮喪し、眼前の小利を爭ひ、永遠の大計を望まざるが如き、然りとす、今に及んで、之を匡救せずば、各自の利益幸福を進むるを得ざるのみならず、延ひて一國の富強に、影響を及ぼさむ。

世人之を以て、我國民の島國生活に歸せりと、其れ或は然らむ、然れども、島國を以て、偉人生せず、大國興らずとせんか、ナポレオンは、コルシカの島より起り、英國は北海の孤島にして、よく世界を睥睨し領土六大洲に普く、其境上に太陽の沒せし事をしと、天下に稱誇するに至りしにあらずや、實に進取濶達の氣象は、是れ島國民の天惠物あり。

然らば、我國民の此弊は、畢竟數百年來の、封建鎖國の政治主義が深く國民の頭腦に銘せられ、今日に至りしものにして、我等の祖先は、決して此特性を有せざりしにあらず、進取勇敢以て、海外に起業、或は交易して、國威を振張し、富國の術を、講せしものゝ如し、さらば鎖國の主義は、我膨脹的國民に、一大打撃を與へたるあり。

然るに、維新以來の進運は、恰も旭日東天に昇るが如く、文華燦然として備はり、武備嚴に整頓し、列強と比肩して、劣らず且世界の大勢は、駭々として進み、弱は強の食餌とあり、優は劣を制し、日に月に、益激甚を加へ、特に東亞の風雲は、益急ならむとし、我國今日の位置は、昔日の位置にあらず、今後は益困難を感ずるあり。繼て未來の國家相續者たる、重大なる責任ある學生内の氣風を見よ、僅少の才學を得たりとて揚々として横行し、意志堅からず、進取の氣なし、偶、抱負ある者ありと雖、或は困窮に遭ひ、或は艱難に遇ひ、之を排進する勇氣なし、志を立てざるか、之を成すの勇なきや、諸子よ、我日本男兒、中等の教育を受け有望なる諸子、蕞爾たる一島國に蟄居する事勿れ、諸子が健腕を振ふべき所、西比利亞に、清國に、南洋に至る處天下の寶庫の、埋沒せられたるにあらずや、諸子知らずや、他國の冒險起業家は着々として成功しつゝあるあり、此の時にあたり、我一步を遅れれば、我國は如何せん、諸子勉めよや。徒らに、あす所なく井蛙の譏りを受くる勿れ。

花 た れ

第三年級 塚 口 佐 太 郎

うら暖たかき春日和に、萌え出でたる若草は、青き毛氈もて布きつめたらん様に、いと美しく、其が中に点

々赤き或は黄ある、或は又紫あるが難れるは、是皆春を飾れる花あり、秋もやう／＼に立ちて、朝風肌に浸む頃には所謂秋の七草あるものが、此所の籬、彼所の野邊に咲き亂れて、轉た聽鶯の思あらしむるは、是亦秋の野邊を飾れる花あり。

あてて花は、美しく艶かにして、誰も我先に手折りて簪さんとするは人情あり、然れども彼等は各々其職分を完うせんとするものあるを、而して天の彼等に授くる生命は、美にして、完成せる實を結ばしめんさせらるあり、されば其容姿の艶あるも、其花の馥郁たるも皆其命を全うせんが爲あり、其容姿徒らに艶雅にして而も其實を結ぶこと能はざるもの、彼の山吹の如きは、何ぞそれ天に反けるの甚だしきや。

され、萬物の靈長と誇稱する吾人、殊に人生の花とも謂つべき吾人青年を省みよ、其容姿は艶華ある錦繡を纏はずとも、彼等の風才は恰も艶ある花に似たり、果して彼等は天より人に授けられたる天命を完うするを得べきか。

抑人に授けられたる天命とは何ぞ、凡そ人の此世にある者必ず踏み行ふべき道あり、是を正當に行ふを天命を完うせし人と云ふべし、然るに此天命を完うせんには、絹帛何の要がある、只要に高雅ある道德と聰明ある智識あらば足りぬべし、是を花に譬へんか、聰明ある智識は艶ある花の色の如く、高雅ある道德は馥郁たる香の如し、此二者あらは天命何の難き事がある。

諸子、宜しく花たるべし、艶麗ある事薔薇の如く、牡丹の如く、馥郁たること梅の如く、高雅あること櫻の如く、將た菊の如くあれ、されど徒らに艶雅に流れて、天命を果さざる弱武者、卑怯者たること勿れ、徳を研き智能を發達せしめて纏て大なる菓の如くに、天命に終へんか。

體育の必要

第二級 山田武治

體育は教育上三大綱の一にして、智育德育、之に相伴ふものあり、諺に活潑ある精神は健康の身體に宿り、健康は智識の母ありと云へり、故に體育は智育より先からざるべからず、要するに青年時代は體育に就き修養を怠らずば成長の後社會有益ある人物となり得べきは疑を容れざる所あり、人の禍福は大抵自分より爲すものあり、西諺に精神の指揮聰明あらざる人は、決して正路を進むこと出来難く、肉體柔弱ある人は決して正路を取ることはざる可しと、是れ實に吾人が服膺すべき金言あり、人生不幸多しと雖も、多病あるより不幸あるはあし、人事蹉跎すること多しと雖も、身體強壯にして意志健全あるものは、百折不撓、終に其目的を達するに至る、身體脆弱ある人は精神も隨て弱く、一の不幸に遭遇することあらば、世間我程不幸あるはあしと歎き、天を怨み人を咎め、遂に世を果あみて自殺する者もあり、是等は天が彼れに堪へ能はざる不幸患難を與へたるにはあらず、生來彼れの父母、若くは彼れ自身が、その身體を修養することをあざりし爲め、彼れが困難を制し、成功に就くの智慮と、勇氣とを缺くの結果あり、心身ともに十中の九までは、教育修養の結果によりて、或は強く或は弱くある、生來弱き人も修養如何によりては、大事業をかし長壽を保ち得べし、具原益軒先生の如きは其の一例あり、實に健康は人生の資本あり、富に勝る富、實に勝る實あり、此富且實かくしては、他に如何ある許多の富且實を有するも無益あり、又健康の身體は、猶ほ道德の精神に於ける如し、身體を健全にあざんとするには、克己心を必要とす、情慾を制して之を適度にせしむる自制力あかるべからず、將來の利害を思うて、現在の快樂を犠牲にするの、智慮勇氣無かるべからず、口に道德々々といふ人必ずしも道德家にあらず、苟も身體健全にして衛生の道を守る青年は自然に道德を修養しつ

あるあり、青年に於て柔弱ありし人、修養の結果、中年以後に於て強壯ある人となりしもの少からず、身體の修養は男女老少の差別あり、併し青年時代に於て之を修養し置かざれば、年老いて取り返しに附かぬことある故、この修養は特に、青年時代に於ておさるべからず、青年諸氏、父母を愛し又國家を愛せば先づ自己の身體を愛せられよ、己を愛せずして、能く人を愛する者あるか、其身を愛せずして、能く天下國家を愛すといふ者あるも、誰かその言を信する者あらん、青年の不道德は一に衛生上にあり、喫煙飲酒暴行淫行等皆然らざるはなし、諸君若し此敵に勝ち得るあらば、人生の行路に於て十に七八は敵を制服して成功するあらん、余は何より青氏諸氏が、喫煙飲酒に耽るの習慣を厭ふかり、青年の身體を害する毒藥あると同時に品格を墮落せしむる最大原因あり、彼れの志望は之が爲めに薄弱となり、彼れの克己力自制力は随つて衰微し、聰明ある智慮斷乎たる勇氣を消失して、彼れは惡魔の誘ふまに流れ行くことにあるべし、彼れは恰も舵を失ひたる船と同様、到底大海の藻屑とあるの外なし、實に恐るべきは如此青年の所爲ありとす、願くは少壯の諸氏、健全ある身體と、健全ある精神とを修養せられんことを

航海

第一學年甲組 居川市二

我が大日本帝國は、萬世一系皇統連綿として未だ曾て一度も外國の侮を受けし事なく、世界屈指の文明國の中に列し、決して支那朝鮮等の比に非ず。豈喜ばしき事ならずや。然るに之に反し、一の悲しむべき事あり其は何ぞや、資金の乏しきこととあり。資金に乏しき時は兵器を買ひ、鐵道を設けんと欲するも能はざるあり。然して今日日本邦の輸出入は如何なるか、明治二十七八年の交清國と兵を交へ、勝戦の爲め貳億萬テール

の莫大なる金を取りしが、其結果如何ありしか、折角血を流して得し償金は何所ともなく散逸し、後は年々歳々輸入は常に超過し來りて、一時經濟の大恐慌を惹起するに至れり。然るに明治三十五年英國と同盟の約を結ぶ、これ甚だ喜ぶべきに似たりと雖も、我國今日の有様を以て、能く英國と比肩し一步を輸することあるを得るか否や。余は之を保證する能はざるを斷言せざるを得ず。若し之を爲さんと欲せば、先づ我國を富さざる可からず、富國の策果して如何ん。西村茂樹氏曰く「航海の業は殊に國民の膽勇を増し、進取の力を養ふものあれば、少壯の者は進みて此業に就き、船の建造法よりして、其使用法にも熟し、常に世界の各國を巡航し、其形勢人情を察し、治世にありては以て國の富源を助け、亂世にありては國威を張らんことを務むべし。西洋諸國が今日の富強を致したるは多くは航海の業に基くと。然り彼の諸國は早くより大船を作り之に乗りて航海を爲し、利金を得て以て其國を富せるあり、嘉永六年米國我國と通商貿易せんとて、水師提督ペルリ大艦に乗りて浦賀に來りし事ありき。之を以て彼等が爲す處を知るを得べし。然るに我が國民は進取の氣に乏しく志氣怯懦にして、狂瀾怒濤を冒し、赤道冰海を涉り、大貿易をなし、大利益を得て我國を富す可き勇氣なく、只此粟粒の如き小天地に小利を爭ふ耳。故に我國は益々貧困に陥るあり。請ふ今の青年諸氏よ愛國心を盛にし益々航海の業を企てられ以て我國の富強を計られんことを切望に堪えざるあり



小金井

文苑舍歌麿

小金井は、武蔵國、北多摩郡にありて、櫻をもて其名高し。されば、花の頃にあれば、其が近在近郷よりは、いふも更かり、徳川幕府全盛の頃、花の江都と謠はれて、誠の花にも富みたる、今の東京よりも、行きて遊ぶ人いと多し。斯くて、東京は上野に、向島に、はた招魂社に、春は、至る所として、花からざるは無し。されば、苟も居を、東京に占むる者は、其花に飽きて、決して、餘所に、心の移り行くが如きいはれはあらざるべきを、猶、或は流車の便により、或は馬をさべ、車を連ねあざして、赴く者、其數を知らざるは都の花よりも、勝れたる所やあらむ。とおのれ曾て、二人二人の友達をかたらひて、行きて見し事ありき。其道程は、東京を距ること五里強ければ、日ぐらし、書齋にのみ立ち籠りて、學校に通ふ外、何事をもあさぬ者の足にては、いかゞあらむ、と氣遣ひしかど、空のけしきうららかにて、いこのごかあれば、あか／＼に心ゆく事も多かりあむとて、遂に、青梅街道を徒より行きぬ。行くこと一里許にて、郊外にいでたるに、見渡す限りは、皆麥畑あれば、目もいと遙にて、さながら青海原の如し。又、菜、蘿蔔あざの、處々に咲き交れるは、黄金、白銀にぞ能く似たる。然のみならず、雲雀は、雲間に高うあがりて、面白うさへづり、胡蝶

は、菜の花に戯れて、立居ひま無きもいとをかし。況して、道の傍に、木立いたう物ふりたる一の家ありて、琴の音のおもしろう聞えければ、結び渡したる生垣の隙より見入るゝに、家居の構へ、庭の作り方、總て、故ありげあれば、如何ある人の住所あらむ、とゆかしくて、暫したゝずめるをりしも、今を盛りと、咲き亂れたる櫻のわたりに、いづこよりか、ふと鶯の飛び來て、琴の音に和するものゝ如く、二聲三聲、いとはやかに鳴きいでしは、いはむ方無くあむ。斯くて、四里ばかり行きけるに、細き流ありて、両側の堤に、大きくはあらねど、櫻の花のいみじう咲きたれば、人傳に聞ける、小金井の面影ありとて、

こゝも亦、小がね井からむ、さくらばあ、清き流れを、へだてゝぞ咲く。

と口ずさめば、

いかあれば、へだてぬ友の、見に來つる、花をへだてゝ、水の行くらむ。

といふかり、

遠近に、花をへだてゝ、行く水も、うつれる影を、へだてやはする。とあらがひあざしつゝ、其川に沿ひて行く程に、一の橋あり。此の所にて、始めて、行きつゞへる多くの人にはあへり。それより次第に、其木は大きく、其並みは繁くありもてゆくのみならず、咲き連ねたる花は、其果も見えて、さながら、白雲の横たはれるに似たりければ、こゝぞ、誠の小金井あるべしとて、共にこをざりしつゝ、大に喜びて、思ふよりは近かりけり。歸さも、猶、徒より行かむとていひて、靜に見もてゆくに、若葉まじりに咲きたるもの多くして、實に、其色香さへ、都の花に勝りたる所あるものゝ如し。又、其木もいと大きくして、枝いみじう廣これり。殊に、小金井橋のわたりは、皆一抱ばかりのものにて、昔、後醍醐の朝に、某が、時に范蠡あきに非ず、とかや書きたりけむやうのものぞ多かる。此の所は、同所の中心とて、四五の割烹店さへ、軒を競

ひて、見物人の雑沓、いはむかた無し。かくて我等は、酒無くて、おんのおれがどいふ程の、俗人にはあらず。さりさて、又これによりて、大に興を増す事を、知らざるにもあらで、玉といふとも豈まさらめやと歌ひけむ人には、聊同意を表する者あり。されば、人稍稀ある某の樓に登りて、數盃を傾け、酔に乗じて猶上さまに行くに、木は、やゝ小さくありたれど、愉快は、益加はりて、遂に其花源をきはめければ、さすがに、身は、つかれ果てゝ、足の運びさへ心にまかせねば、いひがひ無くも、遂に、國分寺より瀛車に乗りて歸りぬ。其を始として、其後、屢行きてめかれたれば、今年は花のをりを、故らに、つれ無く過して、若葉の頃とひ行きしに、人の行きかひいと稀にて、彼の、たはれ男が、少女の装束あやしく着飾り、或はわらはべが、附髻にねびたるさまあざして、人にざれまつはる等の事も無く、雪の村消めきたる化粧して、赤き前掛にて、茶を強ふる女もあらで、おのづからある風景を、損する事もなければ、心安くて、のどかに見ありくに、流るゝ水は、いと清うして、心の塵もおのづから淨まり、繁りあへる若葉の蔭は、いと涼しうして、苔の筵に雅遊を催すに適へり。されば、豫て、携へ來れる瓢を取りいでゝ、獨り傾けつゝ、古き歌をうち誦しあざしけるに、酔もやゝ加はりて、更に物思もあつく、すゝろにいとをかしかりき。花の小金井よりはあか／＼にあむ。

若葉かげ、こゝろの塵も、おのづから、あがれて清き、小がね井のみづ。

心あらむ、人はひとたび、こがねの、わか葉の影も、世に似ざりけり。

ゆく水に、きしのさくらの、若葉さし、はるにまされる、影ぞうつれる。

こはおのれのいまだ東京に學生たりし時にものせし記あれば見む人そのこゝろしてよ。

ちぬの海の春

特別會員 澤村 胡夷

東山の輝月、鴨川の清流、それも望むべく、これにも近き京の假住居、大極殿の青き甍は障子の破れ、雨漏る庇より仰ぐべく、高瀬川の舟唄は思ひを亂る夜半の嵐に冷たき胸を衝く。あゝわが生涯これにて事足るべきを何たる心の駒の物狂ひぞ。

空しく仰ぐ都の月に倦んで、財布の底をはたきて、からくさがし得たる大枚二金を後生大事と懷ろに七條停車場を後ろにして浪速の都へ飛出だしは四月二十七日。天運の盡と言ふべきか、あはれや眼の飛び出でむ程の列車の動搖に膽も心も身に添はず、さりさて今更泣く音も吐けず、まゝよもう一息と車窓に倚りて連峯の緑の梢に思ひを托し、萌え出でたる若緑りに心を遣りつ。瀛車は思ひにあやめるわれを乗せて野を走り、川を渡り、幾多の里をよぎりて、かくて烟塵天に漲り、一百万の民が『生活の戦』に活躍せる都にと立たしめぬ。げにわれは梅田の停車場——大都の門——に佇みけるあり。車馬の影は砂塵に見えつ隠れつ、聖駕を迎ふる緑門はいと高く空をついて立てり。あゝ、一百万の人よ、民よ、暫し『休息』の甘き泉を掬はずや、われらが君のみくるまは二刻のうちに静かにこの大都に近づかんづらんを。

われは徐ろに目を閉ぢつゝ、聖駕の靜かに近かんどき、大都の民が双手を垂れて、君がみくるまを迎ふらんさまを偲びつ。

鳴水子はわれを迎へんとて已にわがかたへにあり。いでやと相拉へて子の宅に行きぬ。

明くれば二十八日、鳴水子、その弟の君と、合せて同行三人、難波の停車場より堺の濱に到りて水族館を見奇異ある魚族の浮游せる狀に一驚を喫し、去つて海濱に立ちぬ。洋々たる海上雲烟渺茫の間、遙かに淡路の

島を望み、白砂の上に踞して静かある春の海に對し、徐ろに潮風を受けつゝ、ひき行く潮に都の人が貝あさりんとて裳裾かき上げて海邊佇める様を、山城に籠り給ひし木曾殿を初め、残りの二人も物珍らしげに眺め入りぬ。猿とやらん呼べるものは能く人の真似をあそぶかや。それに倣ひしにしもあらざらめど、いつしか三人は凜々しげに裾うちからげ、貝を集めんとて、互に勵み合ひ、挑み合ひ、はてはさし潮とあるをも打忘れて、それ『さて貝』よ、それ『はまぐり』よとさきはひ合へる程に、陸より『さし潮とありしぞ、危い危い』と呼び立てられ、初めて心附き……と見れば早や、わが脛のあたりまで潮のさし寄せ居たりしに、あやと狼狽しつゝ陸をさして急ぎ上りぬ。かくて、身仕度もそこへに晝餐したるめんとて燈台の下に行きたり。

押寄する潮のさまを打眺めつゝ舌鼓うちながら、晝餐したるめて後、暫しと休める折から、年の頃七つ位の童、赤銅色したるは潮風にさらされてあるべく、粗布をまとへるは此わたりの漁夫の子供にやあらん。いと賢しげに石だくみを腹這ひつゝ我等が脚もとを横ざりたり。『何、しやうするぞ……』と聲かけられて、にこやかに、『蟹……蟹を捕ふるあり』と應へながら、我等が側に這ひ來りて、此わたりの案内を問ふがまゝに、隈なく物語りつ。

『あれ見給へ、あれが築港ぞ。あの船はそを見むとて行くあり、……何……蟹とぞ、蟹呉れとや、よし、待給へあ、今、しま蟹を捕へて進せやうぞ。藻も採つて進せやう』
くりくりとしたるいか栗頭も振立て石だくみを下りて大きなを捕へ來り、淡黒き藻までとり來て、ほこり顔にわれらに示めしたり。鳴水子の弟の君は已にかの小兒と面白げに石堤の下を這ひつゝ戯れ居れり。空は曇りを帯びて淡路の島の影は見えず、燈台の下を洗ふ浪の花、衣の袖うち拂ふ潮風心地よく、げにちぬ

の海の春の光景、清くもまた長閑やかある哉。

眺めもよし、心地もよし、あゝ堺の濱の春の清遊、興は盡きざれど永き春の日影は落ちて、山のたゞすみまの水の起伏、自ら寂しさを添へて、黄昏の衣はやがてこの海をつゝみ終らんとす。急ぎ二人を拉してかの重に菓子あご取らせ、またの會ふ瀬を約して堺の濱をあごに、……さらば……さらばの聲を遠笛に響かせ、思ひを殘る煙に托して旅の二日の鞋のひばを、またも浪速の都に解きけり。
(をばり)

翁

第五年級 西村 正一

白髪蓬々枯骨憔悴、体軀弓の如く杖によりて歩行するは翁の形あり、あゝ翁、翁、余は翁を見る度に種々の感情胸に充つ、感するまゝに左に記し、讀者の笑に供せん。

一、翁は神聖

翁は神聖にして犯すべからざる風采あり、否心に於ても清く高尚あるものあり、人をして尊敬の念を發し、相對しては常に一步を譲らしむ、何ぞそれ翁の氣高きことよ、彼の尊き神の白髪のお翁とありて枕頭にあらはれ給ひしあごの話は如何に古へより老翁を神聖のものとおせしかを知る。

二、翁の勇氣

昔時は、百万の軍に臨むも敢て恐れず、百雷側に落ち、山河前に崩るゝも敢て動せざりし某あり、今齡七旬に餘り、身は老い精氣衰へたりとも、あごて少壯の人に劣るべきと、老いて益壯に勇氣滿面に溢れ、昔日の